

今もそのとき何を考えていたのか、母もわたしも聞いていません。腕を組んでじつと黙っていた姿が心に残っているだけです。

そのただならぬ様子に怖くなったわたしは、子ども部屋に逃げ込みました。しかし狭い家です。母の声は子ども部屋まで響きます。どのくらい時間が過ぎたころでしょうか、怒ることになり疲れた母の声がしなくなっただけのこと。結局、家も人手に渡ることはありませんでした。もしかしたらあの日の出来事は夢を見ていたのかも。

そんな父の本棚には、背表紙が日に焼けて色あせた『走れメロス』があります。繰り返して読んだのでしよう、小口は手あかで汚れています。父は「だますよりもだまされる方がいいな」と口にすることがあります。「なんて人がいいんだろう」、「口には出しませんが、そう思うこともしばしばです。父がだまされるようなことがあれば、今の生活はできなく、

なります。学校も変わる事になります。
 こういう自分の気持ちを、利己的なか
 と考えることがあります。父のような考
 方が正しいのかなと思うこともあります。
 「もしかしたら父の気持ちが理解できるかも
 しれない」と思い、本棚にあった少し古ぼけ
 た『走れメロス』を手に取りました。『走れ
 メロス』は小学生のとき読んだことがありま
 す。当時の担任の先生は、友情のすばらしさ
 について熱く語っていたのを思い出します。
 二度、三度と繰り返し『走れメロス』を読
 み返してみました。でも、わたしにはセリヌ
 テイウスが人質になった気持ちが理解でき
 ませんでした。そのことを父に話すと、寂し
 そうな表情をして、黙ったままでした。
 人を信じることはすばらしいことなのか
 しれません。しかし、今ある生活が一番大切
 他人よりも家族と自分のことが大事、これ以
 上の答えは、見つかりにありません。
 わたしの考えは利己的なのでしょうか。